大正十四年十二月～昭和三年三月在外研究。工芸化学、化学実験授業担当教授として昭和九年八月まで在職。

畑保之　助教授、写真実習担当

大正十五年五月東京高等工芸学校助教授に転任。

長口宮吉　助教授、写真科理事、工芸化学、化学、化学実験担当

大正十五年五月東京高等工芸学校助教授兼本校講師となり、昭和二年三月まで本校に関係。

久米福衛　講師、写真実習担当
東京高等工芸学校嘱託

大正十五年六月講師を辞任。

伊藤龍吉　講師、写真科修正術担当

大正十五年五月解嘱。

②　西田正秋の起用

大正十五年四月二十三日、西田正秋が助教授（美術解剖授業担当）に任命された。以後昭和四十四年まで本校および東京芸術大学に在職する。

西田は明治三十四年に東京市本郷区西片町に生まれ、翌四十年熊本市に転居。熊本中学校在校中に神戸へ移住して関西学院中学に転校した。中学一年のときから植物学専攻の父の指導のもとで特に動物学の研究を始めた。大正九年上京して同十五年本校を卒業するまでのことは、助教授任命の際に提出した履歴書に次のように記されている。

川端畫學校ハ東京市小石川區下富坂町十九ニアリ。洋畫部ノ教授ハ藤島武二先生、同監督ハ富永勝重先生ナリ。同校通學中約一年間神田ノアテネ・フランセニ通學シ佛蘭西語ヲ修學ス。爾後今日マデ貧弱ナガラ獨習セリ。

美術學校ニテハ教室ハ藤島武二先生ノ教室ヲ選ビ語學ハ英語ヲ選ブ。選擇科目ハ西洋畫科ナリシモ考フル處アリテ大村〔西崖〕先生ノ東洋考古學ヲ選ベリ。

美術學校二年生ノ時特待生ニ選定セラレ級長ヲ命ゼラル。同三年ノ時副級長ヲ命ゼラル。其他種々ノ委員等ヲ命ゼラレシ丁アリ。

同校在學五年間ニハ自己ノ趣味性格上實技ヲ學ブ傍ラ美術ニ關スル各學科ニツキテ聊カ研究ス。就中、藝術用解剖學ヲ最モ好ミソノ研究ヲ専攻セン丁ヲ志シ多少基礎學科ヲモ獨習シ書籍研究材料等ノ蒐集ニモ勉メ今日ニ及ベリ。

（「大正十五年職員関係書類庶務掛」）

ここに記されている「藝術用解剖學」の研究が久米桂一郎に認められて、後継者に抜擢されたのであった。

西田は助教授に任命されるや同じ年の八月から東京帝国大学医学部解剖学教室に通い始め、一年間に亙って屍体解剖実習その他を研究し、基礎知識を修得した。

③　高村光雲の退官および名誉教授推戴

大正十五年三月三十一日、彫刻科主任教授高村光雲が退職した。その長年の功績に鑑み、本校は名誉教授の称号を贈るべく、次のよ

うな上申を行なった。

案

名譽教授奏薦ノ件上申

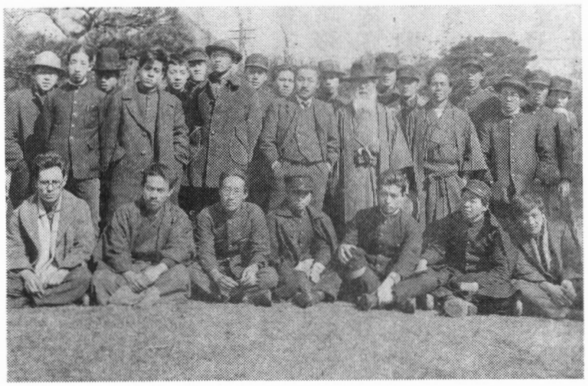
従三位勲二等　高村　光雲

右者明治二十二年七月十二日始メテ本校教授（当時教諭）ニ任ゼラレショリ爾来勤續實ニ三十六年ノ久シキニ及ビ本年三月卅一日七十餘歳ノ老齢ヲ以テ退官シタリ　其間明治三十五年以來本校彫刻科主任トシテ任務ニ勵精シ始終一貫能ク同科ノ發達ニ盡瘁シ生徒ノ薫陶ニ神心ヲ傾ケ積年ノ功勞洵ニ顕著多大ナルモノ有之候　明治四十五年四月廿七日高等官二等ニ陞敘サレ勅任官ニ列セラル　又學校外ニ於テハ前後數回内國博覧會ノ鑑査官ヲ被仰付其他古社寺保存會委員、美術審査委員會委員、帝國美術院會員等ヲ被仰付夫々名譽ナル任務ヲ盡シ候

同人ノ木彫ニ於ケル技倆ハ明治大正期ヲ通シテ夙ニ名聲嘖々タルモノアリテ今更ニ絮説ヲ要セザル所ニ有之殆ンド斯界ニ於テ匹疇ヲ見ザル碩匠巨擘ト稱スベク候　而シテ其ノ本校ニ於ケル美術教育者トシテ壯年ヨリ古稀ノ齢ニ至ルマデ半生ヲ傾倒シタルノ功勞ハ本校名譽教授トシテ推戴スルニ十分ナルモノト認メ候ニ付大正三年勅令第百二十四號ノ旨意ニ依リ同人ニ東京美術學校名譽教授ノ名稱ヲ授與セラル、ノ御詮議相成度此段上申致候也

年　月　日　　學校長

文部大臣宛



木彫部記念写真　大正15年頃（中野將氏提供）

この上申は直ちに認可されて同年六月十六日、光雲は名誉教授となった。名誉教授の称号は大正三年以前は帝国大学教授に限って授与されたが、同年六月十九日、官制が改められて文部省直轄学校教授にまで範囲が拡大された。本校では光雲が最初の受称者である。

光雲の本校および美術界における功績は右上申にもある通り絮説を要しない。その足跡を把握するには『光雲懐古談』（高村光雲著。昭和四年、万里閣書房）、『木彫七十年』（同。昭和四十二年、中央公論美術出版）などの自伝を編集した文献があり、特に後者所収中村傳三郎編「高村光雲年譜」は光雲の年譜としては最も詳密なもので参考になる。但し、編者の見る所では本学所蔵「東京美術学校旧職員履歴書」中の光雲履歴書、名誉教授上申書添付「功績調査書」等は、もとより詳密ではなく、多少誤りもあるが、中村編年譜を補うべき記述が多々あるので、光雲研究には欠かせない資料である。

なお、光雲は退官と同時に退職特別賜金九千五十五円を下賜された。その後、昭和四年十一月には国宝保存会委員、同七年六月には明治大正美術史編纂委員会委員となったが、同九年十月十日に死去

した。

④ 高村豊周の起用

大正十五年四月二十三日、高村豊周（とよちか）が助教授に任命され、鋳造科鋳造実習授業担任を命ぜられた。豊周は高村光雲の三男にして光太郎の実弟。明治二十三年、東京に生まれ、同四十一年に津田信夫に師事、同四十二年四月本校に入学、大正四年に鋳造科を卒業した。在学中に短歌の会、鴨跖草（つきくさ）会を結成、それが黒耀社に発展した。また在学中に青壺会を作り、鋳金作品を発表、卒業後、柱人社、装飾美術家協会等の工芸研究団体を組織して作品を発表した。第九回農商務省工芸展覧会（大正十年）に出品し二等賞を受賞するが、農展のありようを批判する評論を発表し、以後出品しない。同十四年、聖徳太子奉讃美術展覧会委員、国民美術協会常議員、日本美術協会委員を嘱託された。同年、津田信夫がフランスから帰国したとき、豊周は杉田禾堂、北原千鹿、佐々木象堂、山本安曇らとともに津田のもとに集まって金工の研究会を起こし、そのメンバーが中心になって翌十五年に无型を結成した。また豊周は後述のように津田のもとで日本工芸美術会の創立に尽力しており、常に工芸近代化運動の中心人物であったと言える。

新設された帝展第四部で豊周は第八回（昭和二年）から連続三回特選、第十一回（同五年）から推薦、第十五回（同九年）に審査員となった。同二年から无型展を主催、同十年に実在工芸美術会を創立した。同八年には本校教授となり、同十九年まで本校に勤め、同二十五年に芸術院会員、同三十九年に重要無形文化財保持者（鋳金）となる。光太郎の彫刻作品の鋳造は豊周が一切引き受けた。昭和二年には、小諸懐古園の「藤村詩碑」の蠟型原型を本校で製作している。

豊周は歌人でもあり、文筆に秀でていた。本校入学前、新詩社、与謝野鉄幹に弟子入りし、生涯、歌を詠み、昭和三十九年には新年歌会始の召人となり、四冊の歌集がある。また、本校在学中から感想、劇評などを発表、西欧美術思潮の変遷と微妙に関わりながら日本の工芸の在りうべき道を求めた工芸論を展開、真の装飾美術、工芸術から実在主義へと進む新興工芸運動の渦中から痛切な発言をした。著述集『高村豊周文集』全五巻（高村美佐編、高村豊周文集刊行会、平成四～六年、文治堂書店）がある。

大正十一年五月創刊の雑誌『工芸通信』は、発行人が現代の図案工芸社の編集者渡辺素舟、編集所は豊周の自宅（東京市本郷区駒込林町、現在東京都文京区千駄木）に置かれ、渡辺と豊周と田辺孝次が編集した。これより先き、大正八年、豊周らは装飾美術家協会を結成し第一回製作品発表会を開催したが、同じ頃、工芸美術会が本校関係者によって組織され、帝展工芸部設置運動を始めた。それに関連して豊周はウィリアム・モリスの工芸運動は日常生活の用具に美を投入してゆくことから

『工芸通信』